

記念
特集号



日彰館高等学校創立 130 周年

「衆縁和合」の精神を
受け継ぎ、次の世代へ

広島県立日彰館高等学校は130周年を迎え、令和6年4月28日、日彰館創立130周年記念式典を開催しました。同窓会と高等学校で立ち上げた実行委員会が企画し、卒業生や住民約300人が出席。記念行事として、吹奏楽部の演奏、在校生有志27名が作った母校の歩みをたどる動画の上映や、卒業生で文化勲章受章者の人形作家奥田小由女氏による記念講演が行われました。

また、式典に先立ち、善逝寺で館祖祭、式典後には三次グランドホテルで記念祝賀会が行われ、懐かしい思い出や日彰館の今後の展望を語り合いました。



式 辞

広島県立日彰館高等学校
校長

今 川 俊 文



馬洗川の堰堤は葉桜の季節となり、日彰館をとりまく吉舎に山々に新緑の緑と藤の花の紫が映える本日、広島県立日彰館高等学校創立130周年記念式典を挙げるにあたり、公私ともに御多用の中、広島県議会議員 下森宏昭様、三次市長 福岡誠志様をはじめ、多くの御来賓の皆様にご臨席を賜り、同窓生、旧職員といった関係者の皆様、そして生徒、教職員、併せて凡そ300名の皆様とともに、本校創立130年をお祝いできますことに、心から喜びを感じています。誠にありがとうございます。

さて、本校は明治27年4月、奥愛次郎館祖によって創立されました。それは日清戦争の直前で、社会が大きく変わっていく中で、29歳の奥館祖は「新しい知識とともに一人一人の個性を生かし、地域や社会の力になれるような人間教育」を行うことを目指されました。その建学の精神は「三大主義」として日彰館130年の歩みの礎となってきました。

この三大主義とは「徳教主義」「田舎主義」「私学主義」です。「徳教主義」とは功利主義的な伝授のみの教育を否定し、生徒の人格の養成を重視した理念です。

「田舎主義」とは、騒がしい都会よりも静かな田舎こそが最高の教育環境だとする考え方です。この根底には刻々と変化する社会の様々な現象や表面的な華やかさに惑わされることなく、本質を誠実に見極め、未来に活躍する人材を育成すつことを趣旨としたものであり、校訓の「質実剛健」に続いていく理念です。

そして「私学主義」とは自由な立場で教育を受けることのできる環境に

おいて、生徒一人一人と教師との触れ合いによって、生徒の個性に応じた教育を行うという理念です。この「私学主義」は教師と生徒・卒業生全て一大家族のごとく助け合おうとする「衆縁和合」と表裏一体のものであります。

今、私たちの社会は技術分野における革新、グローバル化が急速に進む中で、正解のない課題に対し、様々な人と協働しながら、よりよい答えを求め、新しい価値を創り出し、出していくことが非常に重要になっています。その一方で、人の尊厳や価値観を大切にすることや、愛情、友情といったことは、いつの世になっても変わることはありません。不易と流行という言葉がありますが、社会の変化に関心を持ちつつ、社会が変化しても変わらない価値も大切にしていかななくてはなりません。

生徒の皆さん、皆さんは「日に彰かに」という名を持つ学び舎で学んでいます。日彰館が継承してきた三大主義そして校訓「質実剛健」「衆縁和合」には、今の世の中で求められている力と、いつの世でも変わらない普遍的な価値があります。この日彰館において、他者の存在・価値観を尊重し、誠実に自身を磨き、何事にも果敢に挑戦し、物事の本質を探り究める力を付けてください。

これまで本校は、「日彰館がこの吉舎の地に存立することの意義」を考え、「吉舎だから」「日彰館だから」できる学びを希求し続けてきました。それは保育所、小学校、中学校、そして高校卒業までの18年間を見通した、学校教育機関の連携による吉舎地区での一貫教育であり、広島大学の留学生を招いて実施する異文化交流プログラム「吉舎おもてなしプラン」であり、総合的な探究の時間「田舎主義」における地域探究、地域課題解決の取組であり、多くの学びの活動があります。それは、多くの先人たちが努力して積み重ねてこられたものの上に築かれたものであり、地域の方々の温かい御支援と御協力があつてできています。「衆縁和合」の輪の中で、歴代校長先生をはじめ旧教職員、保護者、同窓生の皆様、御指導をいただいている広島県教育委員会、これまで多くの方々によって日彰館は支え育てられてきました。私たちは自分自身の成長だけでなく、日彰館をもつとよくして次の時代に渡さなくてはなりません。少子高齢化が進む県北においてその道のりは決して平坦ではありませんが、その決意をこの130周年の

節目にいたしたいと思えます。

結びになりますが、本校の創立130周年を意義深いものとするためにお力添えいただきましたすべての皆様、本日御臨席を賜りました皆様に厚く御礼申し上げます、そして皆様の御多幸を祈念いたしまして、式辞といたします。

挨拶

日彰館高等学校創立130周年記念事業実行委員会
委員長

春 田 佳 伯



若葉の香り漂う、本日、日彰館高等学校は創立130周年を迎えることとなりました。この記念すべき日に、下森県議会議員様、福岡三次市長様、篠田広島県教育委員会教育長様、迫田三次市教育委員会教育長様をはじめとして、日彰館の教育に関わってくださった皆様、たくさんのご支援をくださった地域の皆様、本校同窓会会員の皆様、そして在校生の皆様、多くのご列席をいただき、盛大な記念式典の開催に至りました。実行委員会としましては大変ありがたく、感謝申し上げます。

先程来、館祖奥愛次郎先生、歴代の諸先生の眠られる、善逝寺において館祖祭を滞りなく済ませてまいりました。明治27年4月27日、私学日彰館を開校、以来一度も校名を変えなく現在まで続いています。そして明治34年には高等女学部を設立、昭和20年代には中高一貫校を開校、奥愛次郎先生の教育の先見性が遺訓として受け継がれていると思えます。

さて、記念事業は、従来より行っている生徒への支援を教育振興協議会を通して、学習活動などに贈りたいと思えます。そして小規模ですが、日

彰館で学ぶ生徒のための奨学育英制度を開設します。また、予算の許す限り学校周辺の環境整備も取り組む予定です。

次に、記念講演であります。母校の先輩であり、文化勲章受章者 奥田小由女先生にご講演をお願いしております。幸運なことに多忙の中、記念事業ご参画いただきました。感謝に堪えないところです。皆様には、後ほどご視聴していただきたいと思えます。

私どもにとつて大変幸せな周年記念の本年、日本では、世界では、何が起きているか？を記しておきたいと思えます。日本では元旦早々より能登半島地震発生、お悔やみとお見舞いを申しあげます。世界では分断と破壊、戦争の予感の状況です。知識度の高い文明度の高い現在において不思議です。今まさに「衆縁和合」の理念が世界を救ってくれるかもしれません。

私たち実行委員会、同窓会は何よりも誰よりも母校の発展を願っております。何卒、本日ここにご出席の皆様をはじめ日彰館に関わるすべての方のお力とご協力をお願い申しあげまして挨拶とします。

式 辞

広島県議会議員

下 森 宏 昭



広島県立日彰館高等学校創立130周年、誠におめでとございます。

広島県内の県立高等学校の歴史をたどれば、日彰館高等学校は、広島国泰寺高等学校、福山誠之館高等学校、尾道商業高等学校に次いで四番目に創立された歴史と伝統のある学校であり、先人諸氏のたゆまないご努力で築き上げられた130年の歴史に心から敬意を表したいと存じます。

また現在も様々な特色ある取り組みを実行されており、その第一は、「き

さ教育の日」での保育所、小・中学校、高等学校の学習発表会など、保小中高一貫教育の実践として、「保育所から高校卒業までの吉舎地域での18年間の学び」を推進されています。

第二に、「吉舎おもてなしプラン」として、広島大学の留学生を招待し、グループワークやクイズ、高校生が町の歴史と文化を説明する「吉舎の街歩き」など、特色ある国際交流活動を推進されています。

また第三に、文部科学省の「地域社会に根ざした高等学校の学校間連携・協働ネットワークの構築事業」の指定校として、福山誠之館高等学校を配信校とする遠隔授業等の実施など先進的な取り組みを実践されており、これらの多彩な取り組みに敬意と感謝を捧げたいと存じます。

しかし、昨今の少子高齢化により、高等学校入学年齢である15歳人口は激減が予想され、中山間地域の県立高等学校の再編が注目されています。つきましては日彰館高等学校の発展的存続に向けて、日彰館高等学校同窓会や学校運営協議会を中心に引き続きご尽力いただきますようお願いいたします。

結びに、創立130周年を契機に、日彰館高等学校がますます発展されますと共に、お集まりの皆様のご健勝とご多幸をお祈りして、お祝いの言葉といたします。

式 辞

三次市長

福 岡 誠 志

本日ここに、広島県立日彰館高等学校創立130周年記念式典が、盛大に挙行されますことを、心からお慶び申し上げます。

日彰館高等学校は、明治27年に、私立中学日彰館として創立されて以来、学科の改編や校名

の変更を経て、昭和44年に県立に移管され、輝かしい歴史と伝統を積み重ね今日まで来られました。これもひとえに、卒業された方々をはじめ、ご家族及び地域の皆さまの協力・支援、校長先生をはじめとする教職員の皆さま、PTA、同窓会の皆さま方のご指導があつてこそこの歴史であり、皆さまのご尽力に深く敬意を表する次第です。

日彰館高等学校では、創立以来、校訓である「衆縁和合」「質実剛健」のもと、様々な人との交流を通して、多様な価値観と接し、自分自身と他者を大切にする教育活動を進められました。

また、吉舎地域の特色を生かし、保育所、小学校、中学校、高校が連携した保小中高一貫教育として、地域一体で、児童・生徒の学びを深める教育を実践されるなど、県北一帯の高等教育をリードし、地域の活性化にも大きく貢献していただいております。

本市では、「人と想いがつながり、未来につなぐまち」の実現に向けて取組を進めていけるよう、本市の未来を拓く指針として、「第3次三次市総合計画」みよし未来共創ビジョン」を策定しました。策定にあたり、高校生の皆さんからも「三次に住みたい・住み続けたい」「三次に戻ってきたい」と思えるまちづくりについてのアイデアをいただきました。

教育は、ひとつづくりであり、まちづくりの基盤です。

持続可能なまちづくりを実現するためには、生まれ育った地域に誇りや愛着を持ち、夢や希望の実現のために主体的に学び続ける「ひとつづくり」が大切となります。本市のまちづくりに欠かせない人材を大事に育てられてきた、日彰館高等学校との連携を深め、本市の教育がめざすべき姿と方向性を共有させていただき、三次の更なる教育発展のために尽力していく所存です。

結びとなりますが、こうして創立130周年を迎えることができましたのも、関係者の皆さまの献身的なご尽力の賜物と、改めまして、厚くお礼を申し上げますとともに、今後とも、教職員の皆さま方をはじめ、保護者、同窓会、地域の方々などが一体となり、地域から愛され、信頼される学校づくりを一層進めていただきたいと思います。

創立130周年を迎えられる節目に当たり、本日、お集まりの皆さまの



益々のご活躍とともに、三次の教育の未来を担う高等学校としての更なる発展を祈念し、お祝いのご挨拶といたします。

本日は、誠にありがとうございます。

生徒代表の言葉

日彰館高等学校

生徒会長

伊 木 ひ ろ



日彰館開校の年、日本では日清戦争の年として知られている1894年、アメリカでは瓶入のコカ・コーラが初めて発売されました。ロンドンの観光名所、タワーブリッジの使用が開始されたのもこの年です。わが国では、初の記念切手が発売されています。明治天皇の銀婚記念だったそうです。今日の佳き日に出会えた幸運に、ふと130年前に興味を湧き調べてみました。

御挨拶が遅くなりましたが、生徒会長の伊木ひろです。皆さん、こんにちは。本日は、創立130周年記念式典、誠にありがとうございます。御来賓の皆様、大先輩の皆様、本日は御出席いただき、誠にありがとうございます。

今から130年前のこの年、1894年・明治27年4月、館祖・奥愛次郎先生はこの吉舎の地に、「徳教主義」「田舎主義」「私学主義」の三大主義を掲げ、『私学日彰館』を開校されました。しかし、学校の経営は必ずしも順調ではなく、幾多の困難があったようですが、当時の方々の努力により発展を続けました。そして、幾度も変化の時を迎えました。

1969年・昭和44年、日彰館が私立から県立へ移管し、正式名称も、今の『広島県立日彰館高等学校』になりました。しかし、県立移管の直後はもちろん、現在も、三大主義は質実剛健・衆縁和合の校訓として教育の

底流にあり、三大主義を大切にした教育は続けられています。

近年、急速に社会が変化する中で、教育も多様性を求められるようになっていきます。そして、創立130周年目の2024年・令和6年、私たちへ求められるものの一つが、自分で考え、その考えを自分の言葉で他者に伝える力です。私は、現在、生徒会長として生徒会活動に励んでいます。初めは、立候補するのに迷っていました。なぜなら、私は話すときに言葉がすぐに出てこないことにコンプレックスを抱いていたからです。しかし、自分の気持ちを自分の言葉で伝えられるようになりたいと強く感じていました。そこで、あえて私は生徒会長に挑戦することにしました。生徒会長になった最初の頃は、言葉が出てこず涙することもありました。今では、生徒会長として、生徒の皆さんに自分の思いを自分の言葉で伝えられることを嬉しく思っています。

このように、日彰館では勉強の他にもたくさん学ぶことができている日々感謝しています。私は、これからも自分の気持ちを自分の言葉で伝えられるよう、様々なことに自分から挑戦していきます。

生徒の皆さん、日彰館で学んだことが自分の将来にプラスになるよう、奥館祖の理念を大切にして、学校生活を送っていきましょう。

最後になりましたが、この素晴らしい式典を催してくださった全ての方々に感謝し、生徒代表の言葉とさせていただきます。

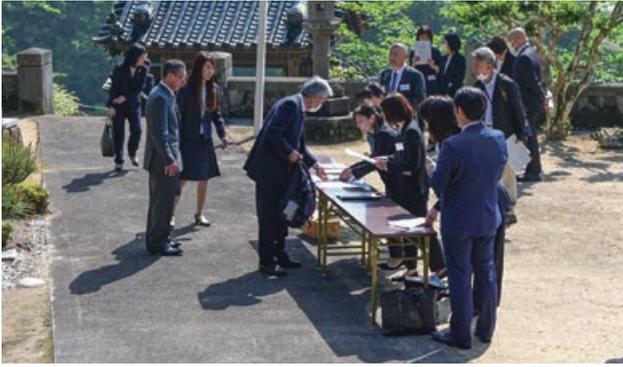




館祖祭

善逝寺本堂において、館祖のご遺族をはじめご来賓の方々のご臨席のもと、同窓会本部役員、支部代表、当番幹事が参列して、令和6年度館祖祭を執り行いました。







記念式典

よっしゃ吉舎ホールにて行われた式典では、生徒による受付や誘導がてきぱきと行われ、生徒による司会で進行で校長式辞や来賓者からの祝辞をいただきました。アトラクションでは、日彰館高校生吹奏楽部による演奏と、在校生がつくった母校の歩みをたどる動画を上映。会場通路には、三次市立八幡小学校全校児童11名が、奥田小由女氏の作品を模して作った人形を展示しました。



記念講演

「愛と夢 一筋の道」をテーマに、多彩なコレクションを抜粋してご紹介しながら、作品の特徴や思い入れなど興味深いお話を聞かせていただきました。

また、吉舎町での日々や夫の奥田元宋氏との思い出など、貴重な写真とともに語っていただき和やかな講演会となりました。



講師 奥田 小由女 氏 (人形作家)

文化勲章受章 広島県名誉県民
三次市名誉市民

プロフィール (略歴)

1936 (昭和 11) 年、大阪府堺市に生まれ、3年後広島県双三郡吉舎町 (現・三次市) に移る。旧姓・川井小由女。創造的な人形作品に影響を受け、日彰館高校卒業後に上京し、紅実会人形研究所で人形制作の基礎を学ぶ。1972 (昭和 47) 年改組第 4 回日展で《或るページ》が特選となり、1974 (昭和 49) 年改組第 6 回日展で《風》が 2 回目の特選を受賞、1988 (昭和 63) 年改組第 20 回日展で《海の詩》が文部大臣賞を受賞。1990 (平成 2) 年、《炎心》にて日本芸術院賞受賞。1998 (平成 10) 年に人形作家として初めて日本芸術院会員に任命される。2008 (平成 20) 年文化功労者に顕彰される。2020 (令和 2) 年に人形作家として初めて文化勲章を受章した。2014 (平成 26) 年に日展理事長に就任 (2022 年まで)、他にも現代工芸美術家協会理事長、日本芸術院第一部長などの要職にあり、日本を代表する人形作家 (工芸家) として活躍中。





祝賀会

午後5時30分より、三次グランドホテルで祝賀会を開催しました。記念事業実行委員会挨拶に続き、生徒たちが周年記念行事の準備に携わった様子の動画上映がありました。今回の130周年記念行事には、生徒たちが積極的に関わっていただきました。約100名の懐かしい顔ぶれに、飲んで語らい、親交を深めることができました。また、ビオラ奏者沖田孝司氏による演奏で盛り上げていただき、恒例の校歌斉唱では全員が気持ちを一つにして大合唱。母校のさらなる発展を願って楽しいひとときを過ごしました。





代々に受け継がれる伝統行事 当番幹事による準備と進行

130周年記念を祝う館祖祭、式典、祝賀会の当番幹事（実行委員）は、平成4年の卒業生が準備から当日の進行まで、約1年を通して担当しました。

日彰館高校の館祖祭は毎年満50歳を迎える学年の卒業生が当番幹事となり、今年の幹事から翌年の後輩幹事にバトンを受け継ぐことで、日彰館の歴史を継承しています。

当番幹事は、同学年の名簿づくりから招待状の発送、パンフレットや会場の準備、当日の受付など協力して進めます。大変な作業ですが、行事を終えた同窓生はみんな、いい経験だったと、新たな交友関係を築いています。

